

18	豊田	中山小学校	スズキアカネ
			氏名 鈴木 紅 寧
分科会番号	6	分科会名	生活科教育

研究題目

仲間と繋がりながら試行錯誤をし、対象への愛着を深める子の育成
 — 1年「わくわく！あきのおもちゃまつり」の実践を通して —

1 主題設定の理由

本学級はとても素直で元気がよく、積極的に発言をする児童が多くいる。一方で、「言いたい」「伝えたい」という気持ちが強すぎるあまり、教師の問いかけや友達の意見を最後まで聞かずに挙手をしたり、発言をしたりしてしまう姿も見られる。また、自分の作品に対してこだわりをもつことができず、最後までやり遂げることが難しい児童もいる。そこで本実践は、仲間との対話を通して、友達の考えを認めたり取り入れたりしながら、おもちゃ作りに取り組む活動を設定し、友達と交流しながら試行錯誤を重ねることで、作る楽しさを感じるとともに、自分の作品に対する愛着やこだわりを深めることができるのではないかと考えた。

そこで、話型を活用した意見交流の場を設け、友達の考えを認めたり取り入れたりする活動や、意見交流を基に試行錯誤しておもちゃ作りに取り組む活動を行った。交流を基におもちゃを改善する活動を繰り返すことで、「仲間と繋がることの楽しさを感じながら対象への愛着を深める児童の育成」を目指していく。

2 めざす子ども像

仲間と繋がりながら試行錯誤をし、対象への愛着を深める子

3 仮説と手立て

〈仮説〉対象（教材）や他者との対話活動を繰り返し設定すれば、気付きの質や愛着を深めることができるだろう。

〈手立て1〉あきいろおもちゃタイムの設定

試行錯誤をしながらおもちゃ作りをしたり、自分のおもちゃに対するこだわりを深めることができるように、秋や秋を生かしたおもちゃと触れ合ったりする時間を「あきいろおもちゃタイム」と名付け、設定する。

〈手立て2〉話型「なかやま」を活用したみつけたよタイムの設定

対話を通して、より自分のおもちゃに対するこだわりを深めることができるように、自分の気付きを共有したり友達の気付きを認めたりする場を「みつけたよタイム」と名付け、設定する。また、その際、共感の姿勢を示しやすくするために、話型『「な」なるほど「か」たしかに「や」やるねえ「ま」まねしてみたい』を活用する。

4 抽出児童について

A児の実態	手立てと期待する姿
自分で気付いたり考えたりすることが得意である。また、制作活動も意欲的に取り組むことができる。しかし、自分で気付いたり考えたりしたことで満足してしまい、他者との対話をあまりしようとしなない。そのため、自分の考えに固執してしまい、愛着が深まりきらない。	試行錯誤をしながらおもちゃを作ったり、自分の気付きを共有しながら友達の気付きを認めたりしていくことで、よりおもちゃに対する愛着を深められるようになってほしい。

5 単元構想図

第1学年 生活科 単元構想図「わくわく！ あきの おもちゃまつり」(全17時間)

【子どもの実態】(〇でできていること ▲課題)

○素直で元気がよく、積極的発言をする児童が多い。

▲教師や友達の話を聞かず、一方的な発言をする児童も多い。



6 実践と考察

(1) あきみつけをしよう！(手立て①)

10月下旬頃、子どもたちは登校してくると、「通学路にどんぐりが落ちてたよ！」「僕は松ぼっくりを見つけた！」と、秋の木の実を見つけたことを教えてくれるようになった。学校でも探せないかという話になったが、本校は工事中のため、前までならあったはずのどんぐりなども見つけることが難しくなっていた。そこで、学校の近くにある緑化センターに行って秋見つけをすることにした。

子ども達が目的意識をもって活動に取り組めるように、ただ拾ってくるだけでなく、拾ってきたら何をしたいかと聞いてみたところ、幼稚園やこども園での経験から、どんぐりごまなどのおもちゃが作れることを思い出し、おもちゃを作っているいろいろな人に遊んでもらうおもちゃまつりを開催することになった。

子ども達は緑化センターで、様々な秋の木の実や葉っぱを拾うことができた。「太っちょどんぐりだ！」「これは細いよ！」というようにどんぐりの形や、「この葉っぱはギザギザだ！」「こっこの葉っぱはギザギザがないな」というように、葉っぱの形に注目している児童もいた。【写真1】



【写真1 あきみつけの様子】

(2) あきのおもちゃを作って、おまつりのじゅんぴをしよう！(手立て①)(手立て②)

「秋のおもちゃを作る計画を立てよう」では、まずは自分たちでどのような秋の木の実や葉っぱを拾ってきたかを確認した。そして、その拾ってきた物でどのようなおもちゃを作ることができるかを、学校図書館で借りてきた本を使って調べ、発表をした。その際、自分たちが楽しむためのおもちゃを作るのではなく、おもちゃまつりに来てくれた人に楽しんでもらうために作るという目的意識を再確認した。A児は、その時間の振り返りで「作りたいおもちゃを決めることができた。おもちゃをていねいに作ることを頑張りたい」という思いを記述した。

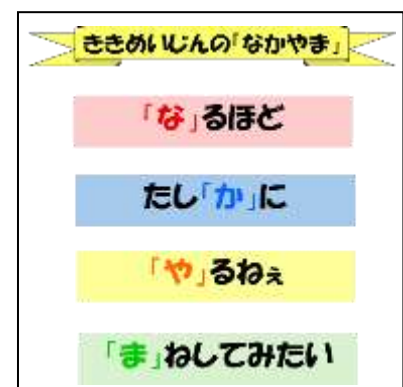
「秋のおもちゃを作って話し合おう」では、自分が作りたいと思ったおもちゃを実際に作り、見つけたことを伝え合う「みつけたよタイム」を行った。A児は、葉っぱを魚に見立てた魚釣りのおもちゃを作ることになった。

そして、おもちゃ作りを始める前におもちゃの材料となる葉っぱと触れ合う、あきいろおもちゃタイムの時間では、葉っぱの点が魚の目みたいであること、葉っぱは触ったらつるつるしていることに気が付いた。また、魚の目を丸く開けようとした際、上手く穴を開けることができず、葉っぱが破れてしまった。しかし、丸ではなく三角の穴にしたら破れることなく開けることができるということにも気が付いた。

【資料1】そしてA児はみつけたよタイムで、おもちゃ作りをしていくうえで気付いたことを発表した。その際、話型「なかやま」を活用していたため【資料2】、友達から「なるほど！」や「たしかに！」

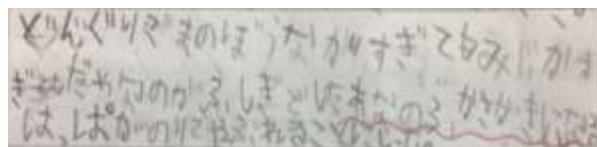
教師：「三角はできた」って振り返りに書いてあるけど、これってどういうこと？
A児：穴を開ける時に、丸く開けようとしたら周りまで破れちゃった。でも、三角に開けてみようと思ってやってみたら、丸にするより簡単にできたんだよ。

【資料1 A児への聞き取り①】



【資料2 児童に配布した話型】

と自分の発言を認めてもらい嬉しそうな表情を見せた。また、他の友達の「葉っぱはのりで破れてしまう」、「どんぐりに穴を開けづらい時は、向きを変えてみるといい」、「松ぼつくりのけん玉の紐は長さの調節が大切」などの気付きを聞き、A児自身も話型を使いながら「なるほど!」「まねしてみたい!」という反応をし、友達の気付きを認めることができた。また、友達の気付きからさらに「どんぐりごまの穴はどれくらい開けているのか深さが気になる」という、新しい疑問をもち、こだわりをもっていた。【資料3】



【資料3 児童Aの振り返り①】

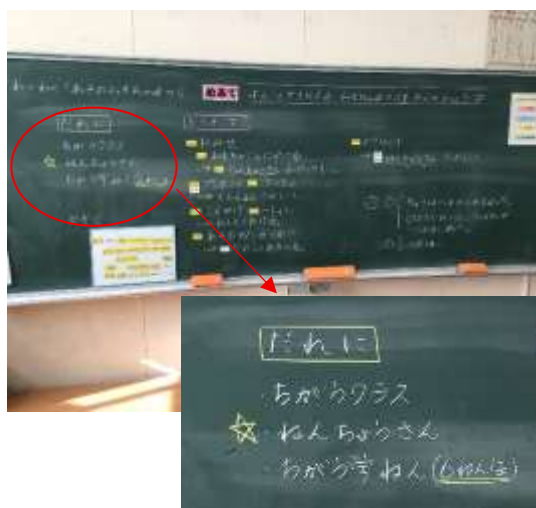
「気付いたことやコツを生かして作り直そう」では、みつけたよタイムを経て、おもちゃまつりに向けておもちゃのパワーアップを図るための、あきいろおもちゃタイムを行った。A児は、「自分のおもちゃを人気にしたい」という思いをもち始めた。そこで、どうしたら人気になると思うか聞いてみたところ「釣り竿も本物みたいに、ぐるぐる巻けるやつにしたい」と考えた。【資料4】これは、目的意識をもっておもちゃを作ってきたことや、あきいろおもちゃタイムやみつけたよタイムを行ったことにより、自分のおもちゃに対するこだわりが深まってきた成果だとうかがえる。

教師：どうしたら、自分のおもちゃがもっと人気になると思う？

A児：うーん。釣り竿も本物みたいにしたいな。本物はぐるぐる巻けるし、そういうやつにしたい。

【資料4 A児への聞き取り②】

「あきのおもちゃまつりの計画を立てよう」では、おもちゃまつりをどのように行うかについて具体的に話合った。A児を含めた子どもたちは、あきいろおもちゃタイムでおもちゃと向き合い、手直しをしてきたことにより、おもちゃへのこだわりが深まってきていたため、とにかくたくさんの人に遊んでもらいたいという思いをもっていた。そこで、「違うクラスの友達に遊んでもらいたい」や「幼稚園の子に遊んでほしい」、「いつも遊んでくれる6年生に遊びに来てほしい」という意見が出た。【資料5】そこで、今回は幼稚園、こども園の子、6年生を対象におもちゃまつりを開くことにした。どのようなおもちゃまつりにしたいかと聞くと、「遊び方の説明をした方がいいと思う」「本物のお店みたいに、おもちゃごとに分けたらおもしろくなる」「たくさんの人に遊んでもらえるように、おもちゃを増やした方がいい」などの意見が出た。A児は、



【資料5 おもちゃまつりの計画の板書】

「拾ってきた木の実や葉っぱで景品を作ってあげたら喜んでもらえると思う。自分は景品をもらえたら嬉しい。」と発言をし、共感の話型「なかやま」を用いて、「たしかに!」「やるねえ!」と意見を認めてもらっていた。また、その日の振り返りでA児は、「Bさんのお店をつくるという意見がたしかにと思った」と、話型「なかやま」を使って記述することができた。話型を提示したことで、相手に自分の意見を認めてもらう経験と、相手の意見を認める経験のどちらもすることができた。

おもちゃまつりの具体的な内容が決まり、「おもちゃまつりに向けておもちゃを作って、話し合おう」では、おもちゃまつりを見据えてよりパワーアップをするために、2度目の手直しの時間を設け、同じグループの子と意見交流を行った。A児は、おもちゃまつりに向けての話し合いの中で「おもちゃの数を増や

した方がいい」という意見が出たため、「魚の数を増やしたい」という思いをもっていた。そこで、魚の数を増やすことにした。試行錯誤の繰り返しやみつけたよタイムを経て、以前よりも自分のおもちゃに対するこだわりが深まってきている様子が分かる。また「おもちゃの手直しをしよう」では、さらによりよいおもちゃにするために、テープの貼り方などを工夫して、見た目がきれいになるように直すことができた。手直しを経て、「おもちゃまつりの練習をしよう！」では、以前の話合いで出た「遊び方を説明した方がいい」「コーナーを分けたい」という意見から、子どもたちが「ルール表を作りたい」「説明の文を書きたい」「おもちゃごとに看板を作りたい」という意見が出たので、おもちゃまつりに向けた準備を行うことにした。



【写真2 友達に遊んでもらった様子】

その後、別のグループで制作活動を行っていた友達に、実際におもちゃで遊んでもらい、説明が分かりやすく伝わるかを確認した。【写真2】また、秋の木の実を使って作ることは叶わなかったが、A児の得意な折り紙を生かして景品を作ることもできた。A児は「ルールを書けて嬉しい。教室の飾りも持ってきた」と振り返りに記述し、おもちゃまつりへの思いを高めていった。

（3）あきのおもちゃまつりをひらこう！（手立て①）（手立て②）

まずは、子どもたちが招待したいと言っていた6年生を、おもちゃまつりに招待した。自分たちが試行錯誤を重ね、愛着を深めながら作ってきたおもちゃで遊んでもらった。「どうやって遊ぶの？」と聞かれたら、練習した説明をすることができた。また、「すごいね！」「楽しい！」などの反応をもらうことができ、A児も嬉しそうな表情だった。【写真3】



【写真3 6年生に遊んでもらっている様子】

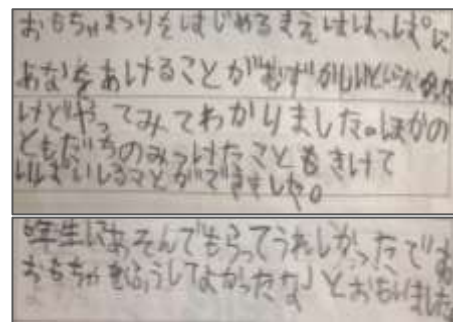
次に、6年生の他にも招待したいと言っていた幼稚園、こども園の年長児にも来てもらった。6年生に遊んでもらう時も自分たちが遊び方のお手本を見せるなどの工夫はしていたが、年長児に対してはお手本を見せるだけでなく、一緒に遊びながら教えたり、説明の仕方を相手に合わせて変えたりするなどの工夫が見られた。さらに、6年生からは「すごいね！」と言ってもらっていた側だったが、年長児に対しては、自分たちが「すごいね！上手だね！」という側になっていた。【写真4】



【写真4 年長児に説明している様子】

全てのおもちゃまつりを終え、「振り返りをしよう」でA児は、「6年生や1年生に遊んでもらえて嬉しかったです。おもちゃを工夫してよかったなと思いました。」と記述した。以前は、試行錯誤をして工夫するということがなかなかできなかったが、今回の単元を通して、試行錯誤をして作ったもので誰かに楽しんでもらう喜び、また楽しんでもらうために工夫し、こだわりを深めることのよさを感じることができたことがうかがえる。さらに、「おもちゃまつりを始める前は、葉っぱに穴を開けることが難しいと知らなかったけど、やってみて分かりました。他の友達の見つけたことも聞けて、

いっぱい知ることができました。」とも振り返っている。【資料6】秋と触れ合うことで、今までは気付いていなかったことに新しく気付くことができたこと、また、友達の気付きを聞くことで新しい発見ができたことが読み取れる。今までであれば、自分が発言したこと、自分が気付いたことが中心の振り返りだったが、みつけたよタイムを行ったことで、対話を通して友達の気付きについても振り返ることができるようになった。



【資料6 A児の振り返り②】

7 成果と課題

(1) 成果

【手立て1】あきいろおもちゃタイムの設定について

秋の木の実やおもちゃと触れ合う時間を多く設けることで、子どもたちは葉っぱやどんぐりの感触や模様にまで気付くことができ、その気付きをおもちゃ作りに生かすことができた。また、試行錯誤をしながらおもちゃ作りをすることで、何度か作り直しや工夫を重ね、より自分のおもちゃに対するこだわりをもつことができるようになっていった。さらに、おもちゃまつりで6年生や年長児に自分のおもちゃで遊んでもらい喜んでもらうことで、より自分のおもちゃにこだわり、愛着をもつことができるようになったと考えられる。

【手立て2】話型「なかやま」を活用したみつけたよタイムの設定について

共感の話型「なかやま」を活用して話し合い活動を行ったことで、子どもたちは友達の意見に反応しようと、今まで以上に周りの意見を聞くことができるようになった。また、聞くだけでなく、「まねしてみたい!」や「やるねえ!」などと声に出して反応することで、友達の考えを自分の中に取り入れることもできた。さらに、自分の気付きやおもちゃに対して共感的な反応をもらったことで、自分の気付きに自信をもったり、より自分のおもちゃにこだわり、愛着をもつことができるようになった。

以上のことから、2つの手立ては有効であり、仮説は妥当であったと言える。

(2) 課題

あきいろおもちゃタイムを通して、子どもたちは自分のおもちゃをよりよくしようと頑張っていたが、やはり知識や技術がまだ足りず、「こうしたい」という思いはあるが、それを実現できない児童もいた。学校図書館で借りた本も見ながら作っていたが、文字やイラストで理解することが難しい様子だった。そこで、秋見つけでお世話になった緑化センターの方や秋のおもちゃに詳しい地域の方などと連携し、コツを教えてもらう機会を設けるなどの手立てがあるとよかったと考える。また、話型を使うことで話し合いは盛り上がったが、だんだん「話型を使いたい」という気持ちが強くなりすぎてしまい、友達が意見を言い終わる前に「たしかに!」などと言い出してしまいう児童もいたため、聞く姿勢の手立ても工夫していく必要があると考えた。今後は、さらに自分の制作物や思いに愛着をもてるような、話し合いの方法を考えていきたい。